

# 第66回現代歌人協会賞選考経過

東 直子

今年度の現代歌人協会選考委員

は、内山晶太、梅内美華子、小島  
ゆかり、外塚喬、富田睦子、吉川  
宏志、東直子(委員長)の七名。

会員アンケート(二〇二一年に  
出版された第一歌集から一〜二冊  
を推薦)の結果(有効投票数二四六

# 現代歌人 協会会報 171

票)を参考にした上で、各委員か  
らの推薦歌集をSageの会議室上  
で討議した結果、二次選考に残す  
六歌集を決定した(三月九日)。

以下、該当歌集を刊行順に記す。

・工藤玲音(コスモス)『水中で  
口笛』(左右社)

・平岡直子(外出)『みじかい髪  
も長い髪も炎』(本阿弥書店)

・奥村知世(心の花)『工場』(書  
肆侃侃房)

・北辻一展(塔)『無限遠点』(青  
磁社)

・山木礼子(未来)『太陽の横』(短

## 歌研究社

・竹中優子(未来)『輪をつくる』  
(角川書店)

この六歌集について、四月一四  
日、学士会館に於いて対面での最  
終選考が行われた。各人のピック  
アップした資料を参照に、推薦ポ  
イントなどの意見を交わした。

・工藤玲音『水中で口笛』

雪の上に雪がまた降る 東北

といふ一枚のおほきな葉書

発想や文体の自在さ、健やかさ

と共にある言語感覚など、読むほ

どに魅力が増す。石川啄木や東北

の風土への思いが芯にある点も注

目された。一方で、歌の中の「私」

に対する疑いのなさ、世界を自分

に寄せているような感じの是非が

問われた。

・平岡直子『みじかい髪も長い髪  
も炎』

三越のライオン見つけれられな

くて悲しいだった 悲しいだ

った

意味や文脈を無化するような独

特の修辞が注目された。前衛短歌

やニューウェーブ短歌等の影響を

受けつつ、さらに新しい短歌を模

索している。不穏な時代の中で心

を守りながら生き抜くことがテー  
マなのではないか。一方、意味が  
取りにくい歌が多く、身体的に響  
くイメージの乏しき、表現や自意  
識の過剰さなどが指摘された。

・奥村知世『工場』

鈍色のスクリーンパーツをひ

とつずつブラシでこする子の

歯のように

女性として工場で働くことや、

子育ての具体的な場面から、現代

女性の抱える普遍的な問題へと思

索を広げている。そうしたコンセ

プトが明確で意図が伝わりやすい

反面、歌の幅を狭めているらしい

もある、という意見があった。

・北辻一展『無限遠点』

起きぬけのしずかなマウス裏

返し腹の黒きに薬剤を打つ

医師である著者の科学者として

の経験を、文学として表現した着

## 第66回現代歌人協会賞

歌集『無限遠点』

北辻一展(きたつじ・かずのぶ)

二〇二二年七月十五日(青磁社)

【略歴】一九八〇年生。大阪府出身。「塔」  
所属。第4回塔短歌会賞受賞。

歌集『みじかい髪も長い  
髪も炎』

平岡直子(ひらおか・なおこ)

二〇二二年五月七日(本阿弥書店)

【略歴】一九八四年生。長野県出身。同人  
誌「外出」所属。第二十三回歌壇賞受賞。

実な表現力による滋味深い青春歌  
が高い評価を得た。長崎の五島列  
島や彫刻家の父など、それぞれの  
テーマに誠実な向き合っている。  
オーソドックスな文体、毒のなさ、  
同社社の歌人の影響等が問われた。

・山木礼子『太陽の横』

使ひすてのわたしがほしい

封切ればあたらしい笑顔で立

ちあがる

子育て中の一人の母の視線から

現代社会を見据え、その心情を率

直かつ冷静に詠み、凄みがある。

痛々しさを感ずる一方で、表現と

してのふくらみに欠ける点がある

という指摘があった。

・竹中優子『輪をつくる』

係の人に喪服を着つけられて

いる母は折り紙のように見え

た

家族や仕事仲間などの人間関係

の描き方が独特で、ユーモアと残

酷さが同居する。傷みや孤独と対

峙する現代女性の心理が客観的に

が描かれている。全体として散漫

さを指摘する声もあった。

昨年度も多数の歌集が出版さ

れ、内容や表現方法は多様化して

いる。現代歌人協会賞の意義も討

議しつつ、傾向の異なる『無限遠

点』『みじかい髪も長い髪も炎』

の二冊を受賞作とすることで一致

した。短歌への情熱がひとときわ強

く伝わる二冊の歌集の受賞を喜び

たい。尚、『水中で口笛』『太陽の  
横』の二冊は最後まで検討された。